

武蔵国分寺跡北西地区の遺跡

# 推定東山道武蔵路

西国分寺地区遺跡調査会

## はじめに

西国分寺地区(旧国鉄中央学園西側跡地)の遺跡発掘調査は、平成5年11月から開始されました。発掘調査は7年度に終了し、8年度以降は整理調査となります。

推定「東山道武蔵路」は試掘調査で確認されましたが、その全容は本調査が進んでいく中で、平成7年10月下旬ごろに明らかとなりました。幅12m、直線で300m以上という古代の大規模な官道がその姿を現したわけです。このことは、研究者や一般の方々の大きな関心呼び、保存要望の声が上がりました。

平成8年1月以降、東京都教育委員会、国分寺市教育委員会、関係事業者、西国分寺地区遺跡調査会、都埋蔵文化財センターなど関係者による推定「東山道武蔵路」の保存取扱いについて協議が行われました。

何度か協議を重ねた結果、各方面からの保存要望もあり、関係事業者は、最終的に都市計画の変更を決断し、平成8年2月22日に全面保存することを表明しました。関係事業者の英断に敬意を表したいと思います。

推定「東山道武蔵路」を現状で保存するには、埋めもどす必要があることから、埋めもどす前に一般公開しようということで、平成8年3月10日(日)当遺跡調査会主催、都埋蔵文化財センターの協力により現地説明会を開催しました。1500名もの多数の参加者があり、あらためて関心の高さに驚かされました。

今後は、整備活用が焦点となりますが、「史跡のまち国分寺」にあった整備がなされるよう願うものです。

この間、ご助言、ご協力いただいた坂詰秀一先生に感謝申し上げますとともに、関係各位のご理解、ご協力に対して感謝申し上げます。

平成8年5月10日

調査会長 柴崎正次

## 例 言

1. 本書は、西国分寺地区住宅市街地総合整備事業に伴う平成7年度発掘調査において検出された推定東山道武蔵路（SF-1・道路遺構）についての概要報告書である。
2. 本調査区は、東京都国分寺市泉町2丁目1番地（旧国鉄中央鉄道学園西側跡地）に所在する。
3. 調査は、国分寺市開発二部、東京都住宅局、東京都住宅供給公社、住宅・都市整備公団の委託を受け、西国分寺地区遺跡調査会が実施した。
4. 本書の編集・執筆は、坂詰秀一団長の指導のもとに、持田友宏副団長・早川泉参与の助言を得て、板野晋鏡が行った。
5. 本書の執筆者名は、それぞれ目次および文責章の文頭に記した。
6. 本書の挿図・図版の作成は、田口直美・司東順香・中野宏子が行った。
7. 本書の内容は、平成8年3月31日における整理段階のものである。
8. 発掘調査および本書の作成にあたって、下記の方々や諸機関よりご指導・ご協力を頂いた。記して謝意を表したい。

木下良、近藤滋、飯田充晴、坂爪久純、山村信榮、木本雅康、福田健司、有吉重蔵、福田信夫、上敷領久、川島雅人、岩橋陽一、武笠多恵子、松田隆夫、荒井健二、塚原二郎、河内公夫、谷口榮、西野善勝、藤原佳代、杉浦由恵、小川将之

東京都教育委員会、国分寺市教育委員会、東京都埋蔵文化財センター、(助)君津郡市埋蔵文化財センター、所沢市立埋蔵文化財調査センター、国分寺市遺跡調査会、府中市遺跡調査会、都立府中病院内遺跡調査会、都営川越道住宅遺跡調査会、武蔵国分寺関連遺跡調査会  
加藤重機建設(株)、国際航業(株)



▲ 調査前の学園跡地（平成3年）

## 目 次

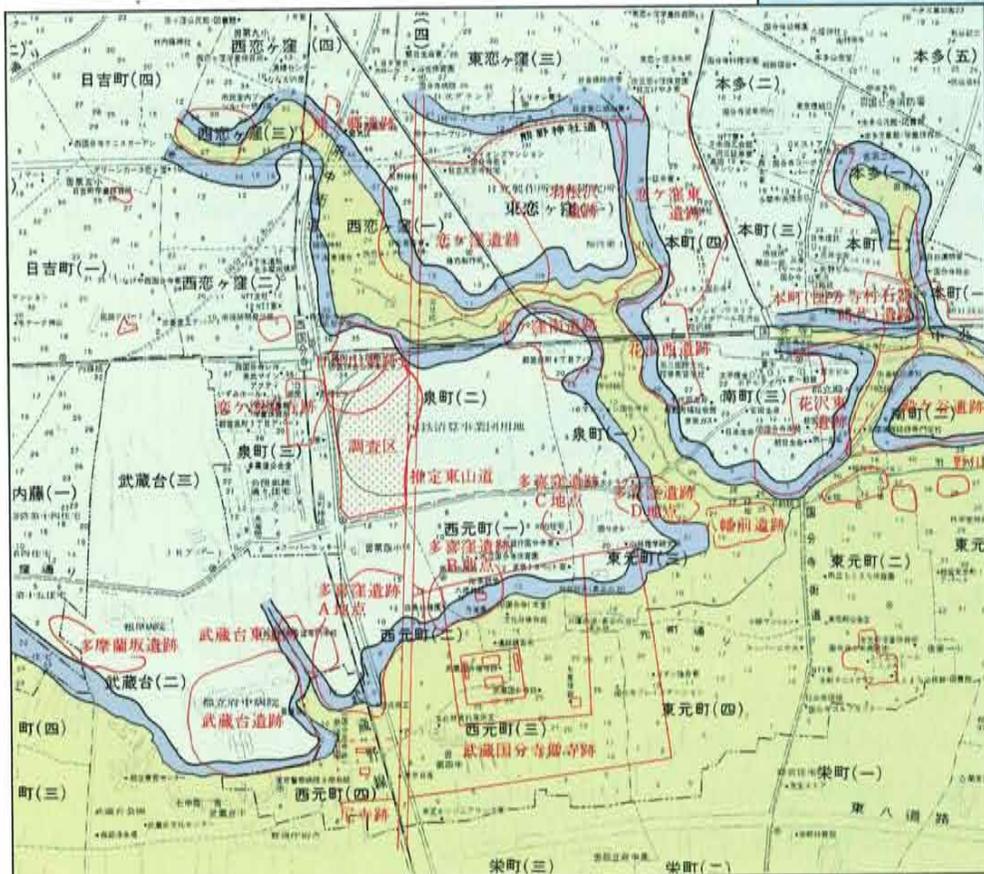
はじめに	柴崎正次	表紙 2
例言・目次		
I. 調査概要	板野晋鏡	2
II. 東山道武蔵路について	持田友宏	4
III. 検出遺構について	板野晋鏡	6
IV. 東山道武蔵路と呼ばれる古代道路遺構	早川 泉	14
V. 「東山道武蔵路」跡検出の意義	坂詰秀一	16
調査会組織名簿 / 報告書抄録		表紙 3

# I. 調査概要

..... 板野 晋鏡

**遺跡の位置と環境** 本調査区は、JR中央線西国分寺駅の南東方向に占地している旧国鉄中央鉄道学園跡地の西側部分に位置している。多摩川左岸に広がる武蔵野段丘面上に立地しており、標高は約79mである。北には野川の開析谷で武蔵野段丘に深く刻まれた恋ヶ窪谷、南方には下位段丘である立川段丘との比高差約12mの国分寺崖線を控えている。南東崖線下には、南北1.5km、東西2kmの広がりを持つ国指定史跡『武蔵国分寺跡』が在り、本調査区は、その北西地区の一画をなしている。また、恋ヶ窪谷の南斜面上には縄文中期の日影山遺跡が在り、調査区北端は一部日影山遺跡と重複している。

恋ヶ窪谷や国分寺崖線下には多くの湧水が在り、遺跡周辺は野川の源流域となっており、下図に示すとおり著名な遺跡が数多くの分布している。特に僧寺・尼寺の中央には、東山道武蔵路と推定される12m幅の直線道路が南北に通過している。また、南4kmの位置には、国庁推定地があり国分二寺との一体化の中で遺跡周辺は古代武蔵国の生活・文化の中心地であった。



凡 例

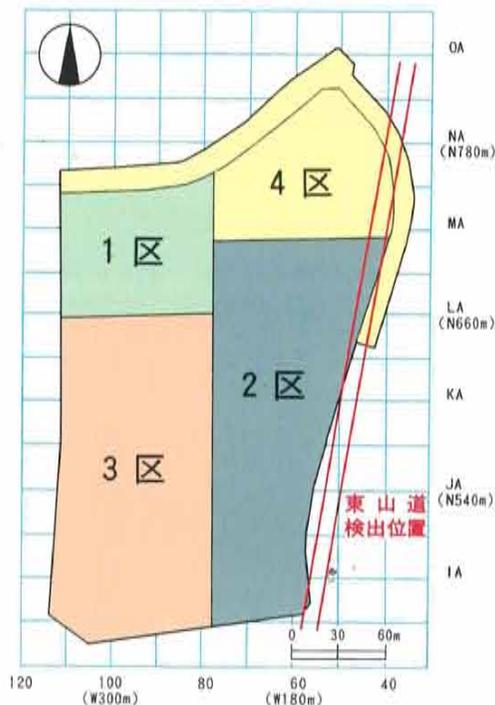
- = 武蔵野段丘面
- = 立川段丘面
- = 国分寺崖線

調査位置と周辺の遺跡

**調査区分** 本調査は、西国分寺地区住宅市街地総合整備事業に伴う事前調査として、平成5年11月から平成8年10月までの4ヶ年計画で開始された。調査区分は右図に示すとおり調査対象地区全体を4地区に区分し年度毎に順次調査する事とした。

今年度は、3区(22,520.64㎡)を対象に調査する予定であったが途中事業計画に一部変更があり調査期間が短縮されたため、次年度調査予定の4区(13,429.64㎡)も同時に調査することとなった。調査面積の合計は、35,950.28㎡である。

**調査の経緯** 昭和53年以降、武蔵国府や国分寺の周辺域で行われた発掘調査や、平成3年に実施された試掘調査において、古代推定東山道武蔵路が当該地区が位置する鉄道学園跡地の中央を南北に通過することが確認されていた。



調査区分図

その後、学園跡地は開発事業に伴い事前に調査される事となり、その西側は当調査会が平成5年度から調査を行い、東側は東京都埋蔵文化財センターによって平成7年度から調査される事となった。東山道の遺構推定位置には、都市計画道路の敷設が予定されており、道路部は東西の調査区の境界にあたるため、東山道遺構の調査はそれぞれの調査機関が分担して行うこととなった。(北側は西国分寺地区遺跡調査会、南側は東京都埋蔵文化財センターが担当。)

遺構全体の本格的な調査は平成7年5月から開始された。調査は、南側埋文センターの調査と同時進行するよう適時打ち合わせを行いながら進められてゆき、平成7年10月、12m幅の道路跡発掘状態全景の空中写真撮影が行われ、総距離340mにおよぶ遺構の全容が明らかになった。

路面は一部削平されているが、古代律令期に構築された溝跡や硬化面など直線道路の跡が生々しく検出されており、340mの遺構がほぼ完全な形で確認された例は全国的に見ても、初めての事である。特に都市化の進む国分寺市域でこれほど大規模な道路遺構が検出された事は、考古学者や古代道路の研究者のみならず、一般の人々の注目を集めた。

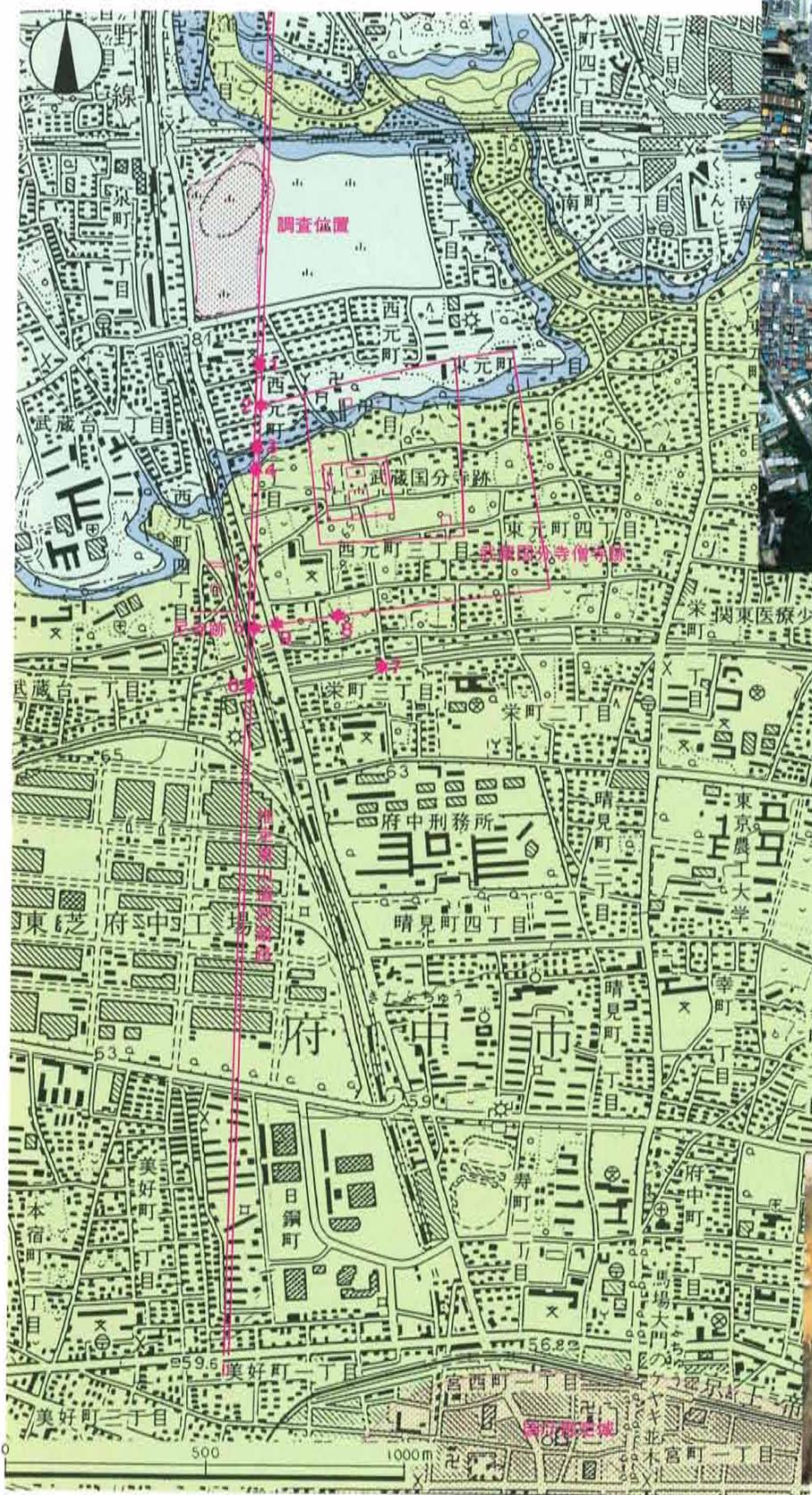
各方面から遺構の保存を望む声が多数寄せられるなか、平成8年2月22日、開発事業者である国分寺市と関連事業者から計画道路の位置を変更するための《「東山道武蔵路」の保存及び活用案》が出され、遺構は全面保存されることとなった。

3月10日、現地説明会が行なわれ、その後、調査の最終チェックを終えた古代の道路遺構「推定東山道武蔵路」は保存のため、砂により埋め戻された。



▲ 砂による埋め戻し作業





▲上：調査区周辺  
下：武蔵国分寺跡周辺

既検出位置

1. 9 m 道路跡検出地点
2. 東側溝と寺地北辺溝の交点
3. 湧水
4. 砂利敷
5. 東側溝と寺地南辺溝の交点
6. 12m 道路検出地点
7. 9.9m 幅の柵跡に囲まれた道路跡
8. 南辺溝を切る住居跡
9. 南辺溝に切られる住居跡



▲No.6地点検出遺構  
(武蔵国分寺跡関連遺跡)

SF-1・道路遺構／既検出位置図

### III. 検出遺構について

..... 板野 晋鏡

推定東山道武蔵路跡は、4区の東端を南北に通過しており、検出された遺構は溝跡4条（SD-29・30・31・32）と硬化面を伴う切り通し状の遺構1基である。溝跡はいづれも南北方向の溝で、その形状・規模・覆土の堆積状態などが酷似していることからSD-29・30とSD-31・32は共に対応関係にあり、それぞれ道路の東西両側溝であると推定される。切り通し状遺構は道路跡の最北部で検出され、路面中央部から東方向に大きくそれながら東側溝を壊し、北東の谷に向かって切り通し状に掘り込まれ構築されている。また、その他に道路遺構と切り合い関係を持つ2条の溝跡（SD-5・33）と土坑1基（SX-13）が検出されている。

道路跡は、各遺構の新旧関係から推察すると次のように最低4時期の変遷が想定される。

**第1時期目**は、東山道構築時の心々距離12m幅の東西両側溝（SD-31・32）を伴う道路跡である。

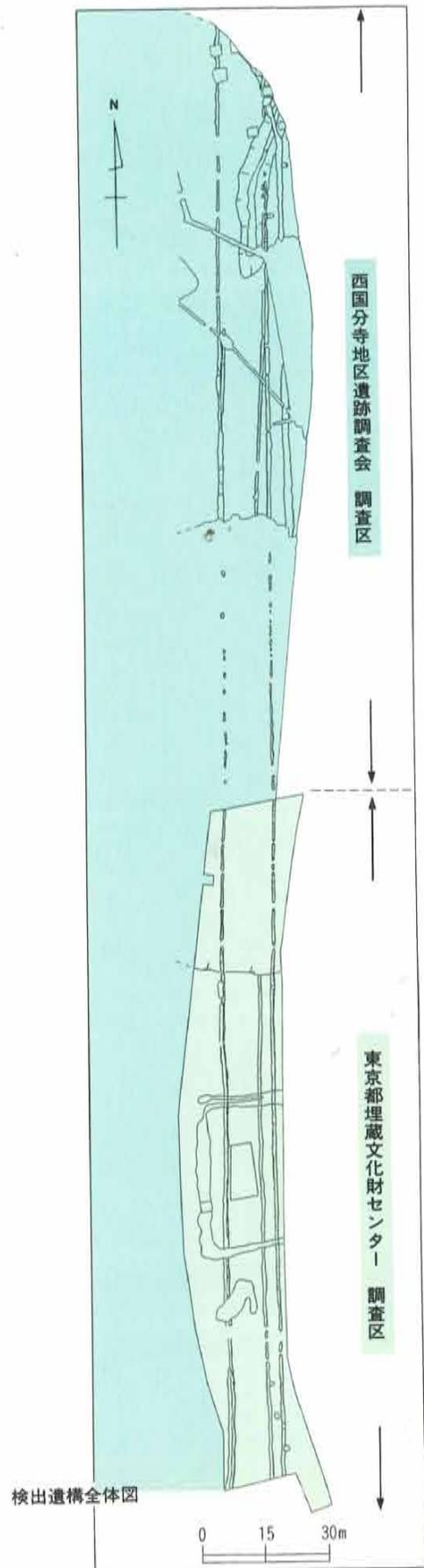
**第2時期目**は、両側溝の上層で検出された硬化面で、溝が埋没した後に使用された道路跡と思われる。

**第3時期目**は、12m幅の道路の上に重複して構築された心々距離9m幅の東西両側溝（SD-29・30）を伴う道路跡である。

**第4時期目**は、道路最北部で検出された蛇行する数状の硬化面と波板状の硬化面を伴う切り通し状に掘り込まれ構築された道路跡である。



◀ SD-30・32(東側溝)  
近景(北から)





▲ 12m 幅道路跡完掘全景（空中写真）

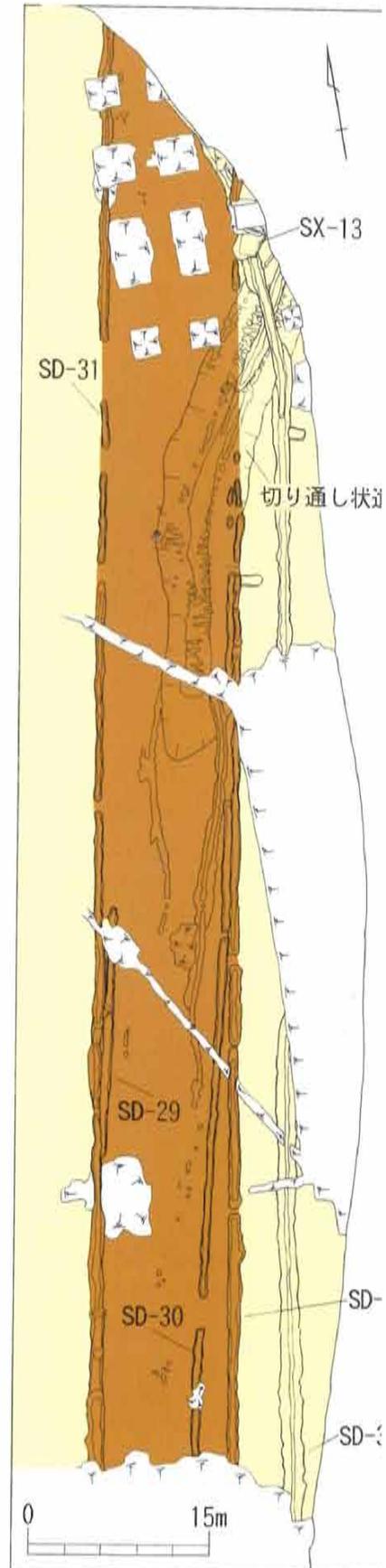
## 《第1時期目の道路跡》

第1時期目の道路跡は、両側溝間の距離12mの幅を保ち、本調査区の北端から埋文センター調査区の南端まで、ほぼ一直線に検出された。その総距離は340mを測る。両側溝は溝とはいっても底は繋がっていない。途中所々掘り残された様に分断されており、長土坑が連続する状態の部分もあった。分断された部分の間隔・長さは一定ではなく、溝幅・深さも一定していない。溝幅は、西溝が40～80cm、東溝が45cm～1mを測る。深さは56～76cmを測り、最深部はハードローム層まで掘り込まれており、溝底には幅15cm程の工具痕が多数検出された。また、溝壁や溝肩は崩れが少なくオーバーハングした部分も崩落していないことから、溝は比較的短期間で埋没したと思われる。覆土は基本的に3層に分かれており、下層はロームブロック主体で黒色土を含む。中間層は粒子の粗い黒色土が主体で締まりは乏しい。上層は黄褐色粘質土層で上面は踏み固められたと思われる硬く締まっている。路面の中央部は鍋底状に窪んでおりやや硬化した範囲も認められた。



◀ 北部側溝プラン  
検出状況(南から)

SD-32完掘 ▶  
近景(北から)





▲ 12m 幅道路跡発掘全景(南から)

## 《第2 時期目の道路跡》

第2 時期目は、両側溝の上層で検出された硬化面で、南側埋文センター調査区でも同様の踏み固められたと思われる黄褐色粘質土層の硬化面が検出されていることから、側溝が埋没した後に使用された道路跡（踏み跡）と思われる。硬化面は溝の検出面からやや下がった位置で検出されており、中央部は皿状に窪んでいる。土層の厚みは、10～15cmを測り下層黒色土との境界はかなり明確に区分される。本来、調査区の周辺では黄褐色の色調を持つ土層は、縄文時代の遺物包含層より下位に堆積しており、溝が埋没する過程で黄褐色土が自然堆積するのは考えにくい。水などの影響により色調が変化したとも考えられるが、下層との区分が明確なことや、上面が踏み跡として硬化している事などを考えると、溝が埋没した後に側溝の上を通路として使用するために人為的に黄褐色土を投げ込み、整備・補修を行った可能性も考えられる。



▲ 溝上硬化面検出(南から)



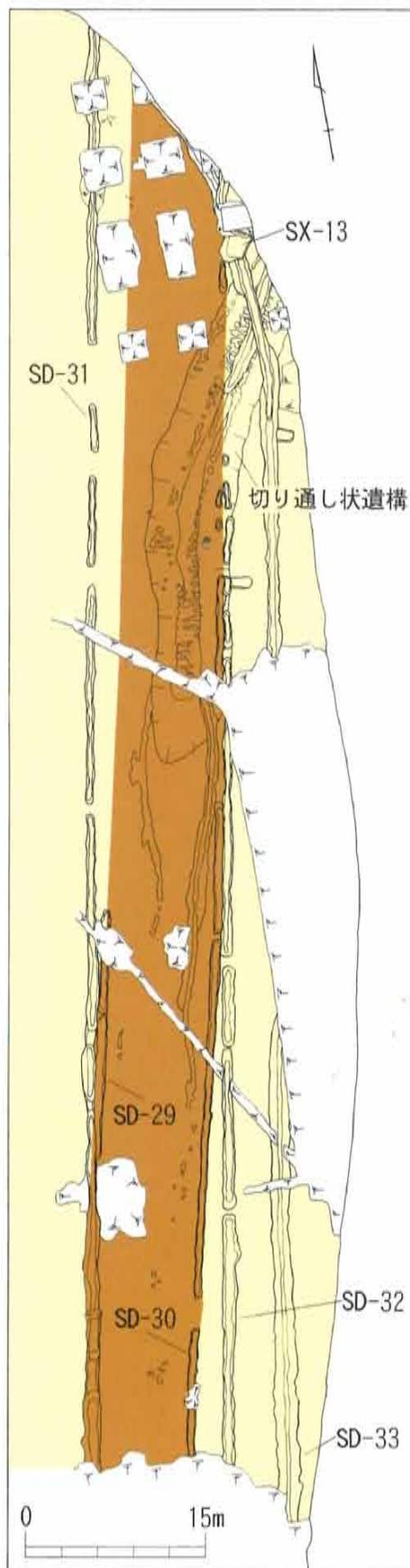
▲ 溝上硬化面検出(北から)

### 《第3 時期目の道路跡》

第3 時期目は、12m幅の道路の上に重複して構築された心々距離9 m幅の東西両側溝（SD-29・30）を伴う道路跡である。西側溝は旧道路の西側溝とほぼ同じ位置を重複して掘っており、東側溝は西側溝から9 m の位置に旧路面を壊して平行に掘られている。調査区南側は鉄道学園の野球場跡で削平されているが南側埋文センター調査区でも同様の規模と位置関係を持つ2 条の溝跡が検出されており、本調査区で検出された溝跡と繋がるものと推定される。両側溝は北に向かうにつれ徐々に東に振れていき、溝の心々距離も次第に広がってゆく。西溝は途中途切れ以北では検出されていない。溝幅は、約54cm、深さは30cmを測る。覆土は基本的に2 層に分かれている。下層は黒褐色土と暗褐色土との混合土でロームを多く含む。人為的に埋め戻された層と思われる、上面は強く締まっている。所謂、掘り方の層である。上層は自然堆積層で、粒子の細かい暗灰褐色土主体で締まりは強い。



◀ 9 m 幅  
道路跡  
完掘全景  
(空中写真)





▲ SD-29-31(西側溝)近景(北から)



▲ 9 m 幅道路跡発掘全景

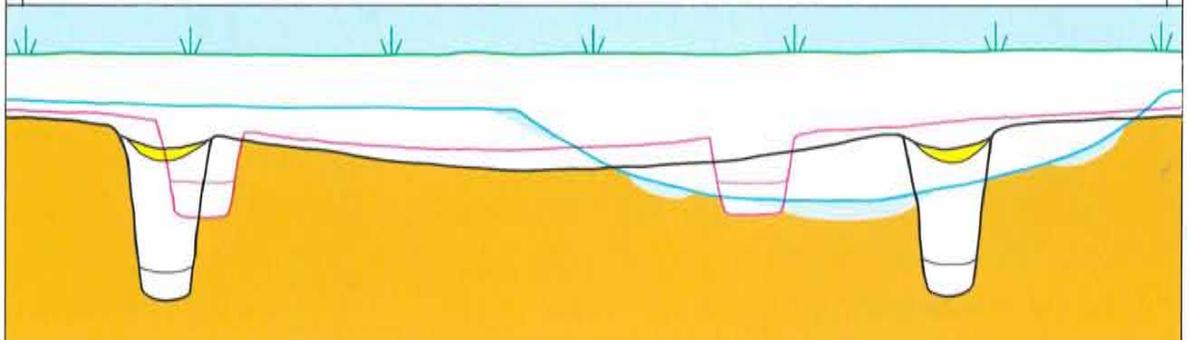
＜土層断面＞



▲ 西側溝土層断面(南から)



▲ 東側溝土層断面(南から)



各遺構断面模式図

- = 第1時期目道路跡路面
- = 第2時期目道路跡路面
- = 第3時期目道路跡路面
- = 第4時期目道路跡路面
- = 硬化面 (踏み跡)
- = 現地表

切り通し状遺構土層断面(南西から) ▼

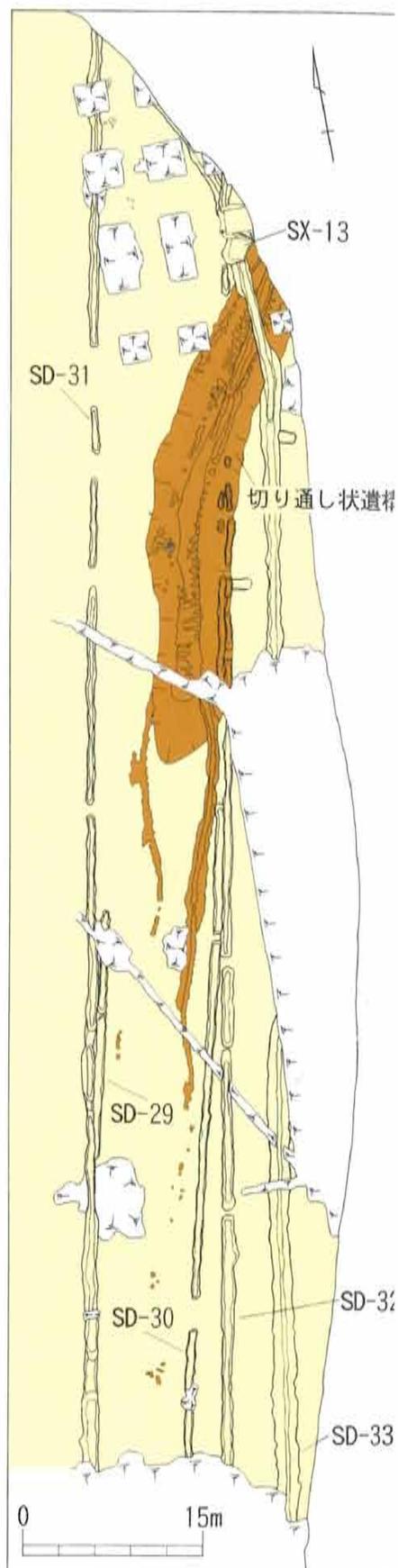


## 《第4時期目の道路跡》

第4時期目は、道路最北部で検出された切り通し状に掘り込まれ構築された道路跡である。路面は旧道路の東寄りの位置から北東に向かって徐々に掘り込まれ、大きく東に逸れながら東側溝(SD-30・32)を壊し皿状に深く掘り込まれている。遺構の幅は7.5m、確認面からの深さは1.1mを測る。道路面には踏み跡と思われる幅50cm程の2条の硬化面が蛇行しながら掘込みに向かって検出されており、硬化面は掘込み部では幅1.8m程の波板状の硬化面となっている。また、掘込みの肩部でも幅50cm程の硬化面が数状検出されており、切り通し状の路面が埋没する過程の中で長期間に渡って道路として使用されたものと思われる。

以上のように、当該地区で検出された東山道に関わる道路遺構からは最低4時期の変遷が想定されるが、この他にも3本の道路遺構が検出されている。2区の南東部で検出された東山道の西側を平行して走る浅い掘り込み状遺構(SF-3)と4区北部(東山道の北側)検出された北方の谷に向かって斜面を下ってゆく幅40cm程の硬化面を伴う浅い掘り込み状の遺構(SF-4・5)である。いずれの遺構も東山道の遺構とは直接切り合い関係を持たないため、道路の使用時期や変遷などは不明であるが、いずれも東山道跡の周辺で検出されていることから、何らかの関わりを持っているものと思われる。

これらの遺構についての説明は、未だ整理段階の途中であり、編集の都合上、本書ではあまり詳しくは触れられないが、4時期にわたる東山道遺構の使用年代や他の道路遺構との関わりなど、課題は多い。これらの解明は今後の整理・検討に委ねると共に、来年度調査予定の北方の谷の斜面地区での調査成果に期待したい。





▲ 切り通し状遺構  
完掘全景(南西から)



▲ 硬化面検出状況(南)から



▲ 硬化面検出状況(南)から



▲ 硬化面検出状況(北から)



▲ 北部遺構完掘全景(空中写真)

## 《その他の遺構》

SD-5は、平成5年度調査区(1区)と平成6年度調査区(2区)でも検出されている東西方向の溝跡で野球場跡で東山道遺構と直交する。新旧関係は切りあい部が削平されているため不明である。

SD-33は、東山道の東側を並行して走る南北方向の溝跡である。切り通し状遺構の手前から西方向に振れながら切り通し状遺構・東側溝を壊し北西方向に湾曲して続いている。

SX-13は、切り通し状遺構の北側の肩部で検出された土坑で、一部SD-33に壊されている。切り通し状遺構との新旧は断面での土層の違いが不明確なことから、同時期かそれほど時期差がないものと思われる。長軸2m、短軸1.4~1.8m、深さ90cmの歪んだ台形型の土坑で、底部に近い位置から南多摩窯G5(10世紀中頃)の須恵器の坏と碗が出土している。



▲ SX-13遺物出土状況(西から)



▲ 出土遺物

## IV. 東山道武蔵路と呼ばれる古代道路遺構

早川 泉

はじめに 東京都国分寺市域からは昭和50年代後半頃から特異な形状をした二条の平行した溝跡が検出されるようになった。それらは規模と方向が同じで、各地点を結ぶと南北方向に直線的に伸びていることから、二本の溝跡に区画された道路遺構であることが判明した。

国分寺市はこれをSF 1道路跡として調査を続けてきたが、府中市域でも同様な遺構が検出され、現在では府中市から国分寺・小平市境まで約4.2kmに渡って確認されている。今回調査した鉄道学園跡地はこの路線上に位置することから、道路跡の存在は調査以前から予想されていた。

**道路遺構の変遷** 道路跡には4時期の変遷が認められた。第1期は溝心々距離12m幅の道路で、溝の形状等から最も整備され計画的に施工された道路である。第2期は1期の溝が粗方埋没したころ、幾分窪んだ溝跡上を踏み固めながら往来した痕跡が硬化面として残されている。第3期は溝心々距離9m幅の道路で、第1期の西側溝と重なるように検出されたので切り合い関係は明瞭である。第4期は調査地区北側で直線的な第1期道路から東側に逸れよるうにゆるやかなカーブを描いて、掘り込み状に下っていく道路である。第1期ならびに第3期道路の東側溝を削り取っている。このため、残された路面の大方は第4期に付随するものである。

各道路は番号順に変遷して行くことは明らかであるが、それぞれの時期を確定する資料の発見は無い。ただ、第4期路面を覆った埋土は、国分寺府中界限で検出される奈良平安時代の遺構の埋土と同質のものであったことと、10世紀中頃(G 5 窯式)の須恵器坏2個体が埋納された方形土坑1基(SX13)が第4期の道路跡の北側肩部分から検出されたことを考え合わせると、この時期までは道路として機能していた可能性が高い。

**構造上の特徴** 両側溝は鰻の寝床状の長楕円形土坑を連結したような形態を示している。それは底面の所々に掘り残された高まりがあり、土坑状の掘り込みの単位を確認できるからである。そのため底面は平らではない。溝の使用時には掘り崩したローム土で平坦に均すため、土層の堆積状況を観察すると、下層にロームブロックの均質な詰土層があり、上層の堆積土層とは明瞭に識別することができる。また、所々に掘り残した土橋状の断点が存在するなど形状は極めて特徴的である。側壁面と底面には明瞭な工具痕が認められ、掘削時のオーバーハングした状態が崩れずに残されている状況は、この側溝が掘削されてから比較的短時間に埋没したことを示している。なお、埋土の堆積状況、側壁面の形状からは掘り返しの痕跡は認められない。

通例遺構確認面は後世の多くの営力によって数10cmは攪乱削平されていると認識するのが一般的である。道路遺構も側溝が確認されても路面は削平されている場合が当然予想されるが、それにも係わらず路面が検出されるのは、左右の側溝面よりも路面が低位に存在するからである。断面形は皿状を呈し、多くの場合その中央部分に硬化面が存在する。検出した路面は、前述したように第4期に付随するもので、側溝は伴わないが、人々の往来により路面が削られ、歳月と共に抉れていった結果、帯状の窪地が形成され、切り通しに近づくほどその抉れは深くなっていった

ものと思われる。これに対し、意識的に削平したものであるとの意見もあるが、平坦地における路面の多くは人々の往来の結果、徐々に削られていったものと考えるのが合理的であろう。崖線部は人工的に削平されているが、築造時は我々が想像する以上に急峻な坂道であった可能性があり、その後は人々の往来、風雨などにより徐々に削られ、ゆるやかな坂道に変化していったものと見られる。このように路面が人々の往来する事によって削られていったと考えるのは、窪みの中心が側溝に区画された道路内のセンターに位置しない事からも裏付けられる。

路面に認められた硬化面は、それぞれの地点で異なった顔付きを示していた。最も南側の部分（東京都埋蔵文化財センター調査地点）で確認された硬化面は通常この地域で検出される硬化面とは異なり、周辺の路面と比較すると、固く締まっている程度の部分であって、床面状の硬化面として認識することは出来ない。中央北側部では、床面状の硬化面が二条、幅40cmの帯状に蛇行しながら北側の掘り込み状の坂道に向けて延びている。この細長い硬化面の状態は古代道路の日常的使用状況を典型的に示している。

北側部分の路面には第1期・第3期は顕著な硬化面は認められない。第4期の路面は、掘り込みを増しながら斜面を下って行く。硬化面はその中央を波板状に連続していくが、最も北側部分でこの硬化面を削り込んで新たな路面が刻み込まれている。時代を重ねながら路面が徐々に削り込まれていく様子を理解することができる。

**歴史的位置づけ** SF 1 道路は歴史地理学を中心に「東山道武蔵路」として積極的に評価されている。1980年代後半、この直線道路の歴史的位置づけについては、これらを調査した国分寺市・府中市界隈の考古学関係者の間では、その扱いについては慎重であった。この直線的大道を「続日本紀」記載の宝亀三年以前の東山道と結びつけることは可能であったが、考古学的にそれを実証するにはデータが少ないと考えたからである。

全国的に古代道の発見が相次いだ時期で、その構造が漸く明らかになりはじめた段階であった。考古学的にはSF 1 道路の構造と変遷をより詳細に明らかにし、その上で歴史的位置づけをどの様の実証してゆかが課題であったが、当初から「東山道武蔵路」が前面に打ち出されたため、その後の研究はそれを前提に帰納的に確認していく方法で進められることとなった。

この道路は、他地域で検出された古代道との比較から典型的な古代道としての形状を示している。その地理的位置が武蔵国府と上野国との最短路線にある。尼寺中軸線がこの道路の方向に強く影響を受けている。武蔵国府の西側境界がこの道路遺構により限られている。道路の築造年代が7世紀第3四半期と考えられている。など多くの点で「東山道武蔵路」であることを肯定しているが、最終的にはこの道路跡に接する駅家の存在が明らかになって考古学的な実証としたい。

なお、埼玉県川越市八幡前・若宮遺跡で「驛長」の墨書土器が発見されているので、その日もそう遠くないであろう。また、この道路の築造技術・構造・路線等が中世鎌倉往還路とどのように関わり、変化していくのかは今後の課題として残されている。

近年の調査でわずか数百m西側に鎌倉街道が検出されている。古代から中世へ歴史のダイナミックな転換期に道路網が果たした役割をいかに引き出すきかは我々に課せられた責務である。

## V. 「東山道武蔵路」跡検出の意義

..... 坂詰 秀一

日本古代史の研究上、すでに先学によって提唱され、定説化している「仮説」的事実がある。古代の官道の実態をめぐる見解もその一つである。

古代の交通については、博搜された関係資料の分析による優れた駅制史の研究や地形の観察、現存地名の検討にもとづく歴史地理学的な研究が広く知られてきた。坂本太郎『上代駅制の研究』(1928)、田名網宏『古代の交通』(1969)、そして藤岡謙二郎(編)『古代日本の交通路』I～IV (1978・79)は、その代表的な業績として関係学界に膾炙されている。また、東山道そのものについては、一志茂樹『古代東山道の研究』(1993)と黒坂周平『東山道の実証的研究』(1994)によって深められている。ともに文献資料を主としながらも、歴史地理学的視点をとり入れての研究であり、踏査事実を縦横に活用している労作である。他方、近年、山陽道において駅館跡そのものの検出がなされ、さらに、各地における大・中・小路に比定される道路跡の発掘も進み、考古学の方法によって古代の道路跡とそれに関連する遺構の検出が実証的に可能であることが提示されてきた。

この度の「東山道武蔵路」跡の発掘も、すでに付近における既知の所見から予想されてきたところであったが、遺存状態がきわめて良好であったため、その実態を仔細に観察検討された例として関係者の耳目を歎てたのである。

幅員12m乃至9m、直線にして340余mにわたって台地上を貫通する道路跡が見事に白日のもとに晒されたとき、中央集権国家の政治体制を眼前にみる事ができたのである。

この「東山道武蔵路」に比定される道路跡は、寶龜2(771)年10月に、武蔵国が東山道から東海道に所属がえになった結果(『続日本紀』)、武蔵往還路は公的に廃止された。

しかし、天長10(833)年5月に、武蔵国は「管内曠遠ニシテ行路難多ク」「公私ノ行旅飢病ノ者多キタメ」「多麻・入間兩郡ノ界ニ悲田処ヲオキテ屋五宇ヲ建テ」ているので、9世紀の中頃には「私」だけでなく「公」の使者も「武蔵路」を通っていたことが知られる。それは武蔵国と上野国との間の交流が活発であったことを示している。

東山道武蔵路は、その起点が武蔵国府の範囲を限定させるのに役立つだけでなく、国分二寺の創建と流伝問題の解明にも有用であり、武蔵国と上野国との中間における駅をめぐる問題にも、一つの拠り所を確実にあたえるものとしてその意味はきわめて重要である。

武蔵路は、武蔵国府内のどの地点を起点として上野国に向うのか。そして、東海道に編入後は東にどのルートを通って下総国にいたるのか。かつての「乗瀧」駅所在地論争も考古学の方法によって解明される可能性が大きく浮上してきた。

東山・東海の二道は、ともに中路であった。それは、日本列島の東への情報伝達の動脈として、また、西への経済的動脈として、古代国家体制の根幹に大きくかかっていたのである。古代の官道、それは中央集権国家にとって不可欠のものであった。

いま、「東山道武蔵路」の検出は、如上の問題に対するキーポイントの一つとなったのである。

## 西国分寺地区遺跡調査会組織名簿

- 会 長 柴崎 正次 東京都教育庁生涯学習部埋蔵文化財担当副  
参事
- 副 会 長 岡村 豊 国分寺市教育委員会文化財課長
- 理 事 坂詰 秀一 東京都文化財保護審議会委員（立正大学教  
授）
- 永峯 光一 東京都文化財保護審議会委員（國學院大學  
教授）
- 藤間 恭助 国分寺市文化財保護審議会委員長
- 清水 文夫 東京都住宅局建設部大規模団地対策室長
- 林部 昶幸 東京都住宅供給公社事業部開発室事業開発  
担当課長
- 永田 晃 住宅都市整備公団東京支社住宅事業第一部  
企画用地課長
- 吉永 文夫 国分寺市開発第二部事業推進課長
- 監 事 本藤 圭孝 東京都住宅局建設部推進課開発係長
- 佐々木徳明 国分寺市開発第二部開発業務課長

### 事 務 局

- 事務局長 和田 利明 調査会職員
- 事務局員 夏目みわ子 調査会職員

### 調 査 団

- 団 長 坂詰 秀一 立正大学教授
- 副 団 長 持田 友宏 日本考古学協会会員
- 顧 問 永峯 光一 國學院大學教授
- 顧 問 吉田 格 国分寺市遺跡調査会団長
- 参 与 早川 泉 東京都教育庁生涯学習部文化課学芸員
- 調査指導員 上村 昌男 国分寺市教育委員会文化財課職員
- 主任調査員 板野 晋鏡 調査会職員
- 調 査 員 伊藤 俊治 調査会職員
- 調 査 員 小林 定之 調査会職員
- 調 査 員 月村 桂子 調査会職員
- 調査補助員 円谷 猛 調査会職員
- 調査補助員 田口 直美 調査会職員
- 整理作業員 司東 順香 調査会職員
- 中野 宏子 調査会職員

(平成8年4月現在)

### 報 告 書 抄 録

ふりがな	すいていとうきんどうむさしみち						
書 名	推 定 東 山 道 武 蔵 路						
副 書 名	武蔵国分寺跡北西地区の遺跡						
編 著 者 名	柴崎正次・坂詰秀一・持田友宏・早川 泉・板野晋鏡						
編 纂 機 関	西国分寺地区遺跡調査会						
所 在 地	〒185 東京都国分寺市泉町2丁目1番地 TEL.0423 (25) 1767						
発行年月日	1996年5月10日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村・遺跡番号	° ' "	° ' "			
武蔵国分寺 跡北西地区	東京都 国分寺市 泉町2-1	13214 No19	35°41'08"	139°28'04"	平成7年 4月1日 ～ 平成8年 3月31日	35,950.28㎡	西国分寺地区 住宅市街地総 合整備事業に 伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
武蔵国分寺 跡北西地区	集落跡	奈良平安時代	道路状遺構 土坑 溝跡	須恵器 土師器	古代推定東山道武蔵路跡		



▲ 調査風景



▲ 3月10日に行われた  
現地説明会では1500人  
の参加者があった。

---

---

武蔵国分寺跡北西地区の遺跡

推 定 東 山 道 武 蔵 路

平成 8 年 5 月 10 日 発行

編 集 西国分寺地区遺跡調査団

発 行 西国分寺地区遺跡調査会

東京都国分寺市泉町 2 丁目 1 番地

☎ 0423-25-1767

印 刷 明誠企画株式会社

---

---

令和 4 年 (2022) 8 月 25 日 デジタル版作成  
底本は B 5 版。

